

日本手話－日本語バイリンガルの育成
～日本手話教育における視聴覚教材の開発及び教授法の研究～

研究代表者 国際学部・教授 山本 雅代

1. 本研究の概要

2008年関西学院大学において、「日本手話」を第2言語として位置づけ授業を行うという試みが開始された。日本手話を福祉の教養科目とは異なる言語科目として位置づけたことは「文部省は全国でもほとんど聞いた事がない」（毎日新聞2007年9月22日）とし、画期的取り組みとして注目を浴びている。そこで、本研究プロジェクトでは、今後の高等教育における日本手話の教授に資するべく、①日本手話の教材DVDの開発②高等教育における手話教育の情報交換（シンポジウム）といった取り組みを行った。

2. 日本手話教材DVDの開発と活用事例

本プロジェクトで日本手話教材として作成したものは大きく分けて以下の4つである。

- I. ろう者の1人語りによる手話語り教材 II. 2人のろう者によるインタビュー教材
III. 博物館等における手話レポート教材 IV. 手話に関する手話講演教材

以下、それぞれの教材の概要と活用事例について紹介をする。

I. 手話語り教材

①教材の概要；手話語り教材とは、日本手話のネイティブ話者であるろう者が様々なテーマで話をするというものである。テーマは、初級者用の「自己紹介」以外にも、「面白い話」や「死ぬかと思った話」「怪談」「なれそめ」など多岐にわたり、時間は1～5分程度と比較的短い。

②活用事例；人間福祉学部日本手話Ⅱの授業の場を利用して、実際に手話語り教材を用いた授業を行った。自己紹介の教材については、ほとんどの学生が今まで習ってきた手話単語の知識を用いながら読解していく事ができた。「面白い話」などでは、初めて出会う単語も多く含まれている事から、先の自己紹介のような場合とは異なり、単語の学習も読解と並行して行った。また、日本語に翻訳する事が目的ではないので、必要の都度、プリントを配布して内容についての選択式の質問をした。学生からは、普段目にする大学内のろう講師以外のろう者の手話を見る事ができ勉強になるという声や他の人の手話も分かる自信がつくといった声も聞かれた。

Ⅱ. インタビュー教材

①教材の概要；インタビュー教材は、インタビュアーとインタビューイの2人のろう者の手話を収録したものである。ある程度、ろう者の手話が理解できるようになったとしても、いざ実際にろう者と会話をすると、話を聞いている時の表情や相づちのタイミングが難しいという学習者のためにあえてインタビュアーを登場させ、その反応も含めて学習ができるというものである。

②活用事例；人間福祉学部日本手話Ⅲの授業の前半（4月～5月）を利用して教材活用を行った。教材の導入段階では、「インタビュー；私は誰？」という映像を用いた。これは、インタビュアーがある歴史上の人物になりすました相手に、年齢や出身地、特技等を質問していくという形で進められ、学習者はその相手が誰なのかを当てるというものである。そのような映像に慣れた段階で徐々に、インタビューイの語りが長いものや内容が複雑なものへと教材を移行させていった。また、インタビュアーの相づちについても映像を見ながら解説を加え、手話でのコミュニケーションがより円滑にできるようにした。

Ⅲ. 手話レポート教材

①教材の概要；以下のような、ろう者が博物館や観光スポットに出向き、実際の建物や展示物について解説を行っていくというものである（博物館では、事前に収録の許可をいただいている）。博物館や観光スポットは関西中心であり、学習者が興味をもちながら手話を読んでいけるという特徴をもつ。

教材	教材の特徴や教授のねらい
関西学院大学	ある程度熟知している内容について、日本手話での解説の方法を学ぶ。 ビデオで用いられる手話単語についても既知のものが多い。NMSの学習
国立 民族学博物館	短い解説が多い。展示品を見せて、これは何に使う？といったクイズのよ うに考えながら見ていくものが多く、展示品と手話の内容が近い。NMS
明日香村	石造物等にまつわる神話などが多く、背景から解説を読み取るのは難しく なってくる。石造物のCL表現が多く、CLの学習に適当である。
★その他にも、手塚治虫記念館、インスタントラーメン発明記念館、生野コリアナ、清水寺、伊丹昆虫館、有馬温泉、有馬富士公園、千刈キャンプ場、自動車部、新月祭、小豆島、るり温泉溪、ルミナリエ、天王寺周辺、地すべり資料館などの教材を作成。*博物館の場合には、許可を得てから撮影。	

②活用事例；人間福祉学部日本手話Ⅲの授業の後半（6月～7月）を利用して教材活用を行った。あらかじめ、内容に関するクイズ形式のプリントを用意し、5人程度のグループで手話を見ながら、相談し解いていく形で進められた。また、シャドーイング教材としても活用し、7月には学生は展示物の写真などを用いながら教室で展示物の解説を行った。さらに、有志を募り、国立民族学博物館のビデオ資料に出てくるろう者の手話を参考にし、ろうの子ども達などに博物館をガイドするイベントも実施した。参加した子どもたちやろう児をもつ親に非常に好評であり、学生たちからも教室で学んだ事を実際に活用できてよかったという声が聞かれ、学習のモチベーションにもつながったと感じている。

IV. 手話講演教材

①教材の概要；手話やろう者に関する講演の様子を収録したものである。学習者がろう者とコミュニケーションができるようになるには、ろう者の社会・文化背景の知識も重要となってくる。そこで、ろう者や手話に関する以下のような様々なテーマでの講演をビデオに収録した教材を作成した。

②活用事例；人間福祉学部「日本手話Ⅱ」及び「日本手話Ⅳ」の授業の後半に手話研究発表という時間を設け、学生たちが5人グループとなって自分たちの好きなテーマを決めて研究発表を行った。（特に「日本手話Ⅳ」は、通訳を用いず、学生が手話のみで発表を行った。）その際に、手話講演教材も参考資料として活用した。手話講演教材は、参考資料として人間福祉学部の資料室の教員参考資料棚に置き、学生が閲覧できるようにした。また、学内LANシステムを用いYフォルダーからも閲覧できるようにした。

3. シンポジウムの開催

前述したように日本の大学、高等教育における日本手話の授業は始まったばかりであり、高等教育における日本手話の教育にふさわしい、教材の開発や教授法など様々な課題を抱えている。しかしながら、今までどのような大学でそういった教育がなされているかというまとまった情報はない。そこで、情報交換の契機とすべく「大学における手話教育シンポジウム」を開催した。各大学の取り組みを発表したシンポジストは以下の通りである。

第1回2009. 12. 6 シンポジスト（発表順、敬称略）；前川和美（関西学院大学）
大江さやか（梅花女子大学）海野和子（藤田保健衛生大学）亀井伸孝（東京外国語大学）

第2回2011. 1. 9 特別講演「なぜナチュラル・アプローチなのか」海野和子

シンポジスト；松尾美幸（兵庫教育大学院）島田二郎（大阪国際大学）下城史江（お茶

の水大学)

4. まとめ

今回は、教材作成やネットワークの構築の土台づくりを行ったものにとどまった。しかし、2011年度の日本手話学会の学術誌「手話学研究」の特集に「大学における手話教育」が取り上げられるなど、高等教育における手話教育の関心は確実に高まってきている。今後、教材の活用の効果の検証やネットワークのさらなる構築が求められるであろう。